

ハワージャ・サラールはいかに LGBTQA+ 言説を翻訳するのか — パキスタンにおける第三の性共同体の交渉と実践 —

Beyond “Transgender”: Translating LGBTQA+ Discourses among the Khawaja Sara in Pakistan

国立アイヌ民族博物館 研究員 劉 高力

Researcher and Curator at the National Ainu Museum LIU gaoli

要旨

本稿は、現代パキスタンにおけるハワージャ・サラール（Khawaja Sara）共同体と LGBTQA+ 運動との関係を民族誌的に検討するものである。近年、パキスタンでは性的少数者の権利をめぐる法整備や国際的な人権運動の拡大に伴い、ハワージャ・サラールはしばしば「トランスジェンダー」あるいは「LGBTQA+ コミュニティ」の一部として語られるようになった。しかし、ハワージャ・サラールの自己理解は、欧米を中心に形成された LGBTQA+ のカテゴリーと必ずしも一致していない。本稿は、2011年から2025年にかけて筆者がパキスタン各地で実施した参与観察をもとに、KS 共同体がグローバルな LGBTQA+ 言説をどのように受容し、翻訳し、再解釈しているのかを分析する。特に、①ハワージャ・サラール共同体の自己理解、②LGBTQA+ 言説が共同体へ流入した経路、③その過程で生じた代表性、宗教、資源配分をめぐる交渉に注目する。

キーワード：ハワージャ・サラール、ヒジュラ、LGBTQA+、トランスジェンダー、パキスタン

Abstract

This paper ethnographically examines the relationship between the Khawaja Sara community and LGBTQA+ discourses in contemporary Pakistan. In recent years, alongside the expansion of legal protections for sexual minorities and the growing influence of international human rights movements, Khawaja Sara have increasingly been described as “transgender” or as part of the broader LGBTQA+ community. However, Khawaja Sara self-understandings do not necessarily correspond to the LGBTQA+ categories—lesbian, gay, bisexual, and transgender—that were largely developed in Western contexts. Drawing on participant observation and interviews conducted by the author across Pakistan between 2011 and 2025, this article explores how the Khawaja Sara community has received, translated, and reworked global LGBTQA+ discourses. It focuses on three questions: (1) how Khawaja Sara understand themselves; (2) how LGBTQA+ discourses entered Khawaja Sara communities; and (3) how issues of representation, religion, and resource distribution have been negotiated in the process.

Keywords: Khawaja Sara, hijra, LGBTQA+, transgender, Pakistan

第1節 はじめに

南アジアにおいて、男性／女性という二分法に収まりきれない「第三の性」の人々は、長い歴史の中でさまざまな名称によって呼ばれてきた。インドにおいては「ヒジュラ」という名称が広く知られ、宗教儀礼、祝福、呪詛、物乞い、売春、共同生活といった実践を通じて、独自の社会的位置を築いてきた。独立後、現代パキスタンにおいても、同一集団は存在してきたが、2009年以降、国家制度の中で「ハワージャ・サラール」(KhawajaSara, 以下KS)という名称が用いられるようになった。また、国際人権運動の発展とともに、LGBTQA¹という性的少数者に包摂的概念は世界各地へ広がり、多くの国において性的少数者に関する政策や社会運動の基本的枠組みとなっている。国際連合をはじめとする国際機関、多国間援助機関、国際NGOは、LGBTQA+の権利保障を人権課題の一つとして位置づけ、各国政府に対して制度改革を求めてきた。

それらの活動を通じて、普通のパキスタン人は具体的な意味を知らなくても、ゲイとトランスジェンダーという単語はよく耳にする。ハワージャ・サラールのことをゲイやトランスジェンダーと呼ぶことも多い。このように、性身分が曖昧な人々を同じ種類であると考え、ハワージャ・サラールもゲイもトランスジェンダーも同じ意味であり同じ人を指すと考える人が少なくない。

2009年から2012年にかけて、パキスタン最高裁判所は性的少数者の権利保護を目的とした一連の判決を出した。KSが正式な呼称として採用された。また、2018年、パキスタンでは「トランスジェンダー保護権利法 Transgender Persons (Protection of Rights) Act」が成立した。この法律は、トランスジェンダー当事者による自己認識に基づく性別登録を認め、教育、雇用、医療、政治参加などにおける差別を禁止するものであり、国際社

会から高く評価された。しかし、法的承認はただちに社会的理解を意味しない。また、国家による命名は、当事者の自己理解をそのまま反映したものでもない。KSという名称は、歴史的にはムガル帝国期の宮廷やハーレムにおける宦官的役職に由来し、現代パキスタンでは、ヒジュラ、ゼンナナ、ナルバン、トランスジェンダー、第三の性といった複数の概念の交差点に置かれている。したがって、KSを単純に「パキスタンのトランスジェンダー」と翻訳することはできない。筆者は別稿において、パキスタンにおけるKSという名称が、宗教的象徴、歴史的語彙、法制度の交差点において制度化されてきた過程を検討した。そこでは、KSという名称が単なる呼称ではなく、国家による包摂と管理、また当事者による自己理解の再編を伴う制度的構成物であることを論じた(劉 2025)。

これに対し本稿は、命名と制度化の問題そのものではなく、制度化後のKS共同体が、LGBTQA+やトランスジェンダーというグローバルな言説とどのように接触し、それをいかに受容、利用、再解釈しているのかを民族誌的に検討する。

本稿が明らかにしたいのは、「KSはLGBTQA+なのか」という問いそのものではない。むしろ重要なのは、グローバルなLGBTQA+言説がパキスタン社会へ流入したとき、KS共同体がそれをどのように理解し、自らの文脈の中で利用してきたのかという点である。そのため本稿では、以下の三つの問いを設定する。

第一に、KS共同体は自らをどのような存在として理解しているのか。

第二に、LGBTQA+言説はいかなる経路を通じてKS共同体へ流入したのか。

第三に、その過程において、KS共同体とLGBTQA+活動家との間でいかなる交渉や摩擦が生じたのか。

本稿では、これらの問いを検討するために、Sally Engle Merry (2006)の翻訳・土着化

1 「Lesbian(レズビアン)」「Gay(ゲイ)」「Bisexual(バイセクシュアル)」「Transgender(トランスジェンダー)」「Questioning(クエスチョニング)」または「Queer(クイア)」「Asexual(アセクシュアル)」または「Ally(アライ)」の頭文字である。「+」は、これら以外にも多様な性のあり方が含まれることを意味する。

(vernacularization)の概念を参照する。Merryは、トランスナショナルな人権概念がローカルな社会に受容される過程を、「vernacularization (地方語化／土着化)」として論じている。Merryによれば、人権やジェンダー平等といった普遍的に見える概念は、そのまま地域社会に移植されるのではなく、NGO活動家、地域リーダー、弁護士、社会運動家などの「媒介者 (intermediaries)」によって、地域の制度、宗教的实践、家族関係、道徳観念に即して翻訳される。この媒介者は、国際的な人権言説とローカルな生活世界の双方を理解する存在であり、グローバルな概念を地域社会に伝えるだけでなく、地域社会における苦痛や不正義を国際的な人権言説へと翻訳する役割を担う。しかし同時に、彼ら／彼女らは双方から不信や操作の対象となりうる脆弱な立場にも置かれる (Merry 2006)。

この視点は、KS共同体とLGBTQA+言説の関係を考えるうえで重要である。すなわち、LGBTQA+という国際的な権利言説は、単純にKS共同体の自己理解を置き換えたのではなく、HIV/AIDS対策、NGO活動、国際援助、法制度改革などを通じて共同体に入り込んだものとして理解できる。ただし本稿では、この過程をLGBTQA+言説の一方的な浸透としてではなく、KS共同体が自らの宗教観、共同体秩序、生活実践に応じて選択的に利用し、受容、翻訳、交渉、抵抗、再構成していく過程として捉える。

調査方法としては、参与観察、ライフヒストリー・インタビューを中心に用いた。特にラホールでは、KSのグルであるAsheeとの関係を通じて、共同体内部での生活観察を継続的に行った。また、2015年代以降はNGO活動家、HIV/AIDS関連団体職員、人権活動家などへの聞き取りも行い、共同体とLGBTQA+運動との関係について調査を進めた。

第2節 KS 共同体の自己理解

(1) グル・チェラ制度 (Guru-Chela System) と擬制的親族関係

筆者がKSと初めて出合い、ラホールのグルであ

るAsheeとの関係を通じて共同体内部の生活世界へ入っていった経緯については、別稿で詳述した (劉 2025)。そのため本稿では、フィールドワークへの参入過程を繰り返すのではなく、KS共同体の自己理解を支える社会的基盤を確認することから議論を始めたい。

筆者にとって最も長期にわたるフィールドはラホールである。2015年以降、筆者は断続的にグルであるAsheeの家で生活を共にするようになった。特に2017年5月から2018年6月までは、1年以上にわたり、筆者が「母」と呼ぶAsheeと同じ家で暮らした。食事を共にし、冗談を言い合い、共同体内部でのみ用いられる言葉を教わる中で、Asheeは単なる調査対象ではなく、家族に近い存在となっていた。また、弟子たちと共に外出し、ときには結婚式や宗教行事にも同行する中で、筆者は次第に、KSとは単なるジェンダー・アイデンティティではないことを理解するようになった。それは、独自の親族関係、宗教実践、相互扶助によって支えられた一つの社会的世界なのである。

KS共同体を理解するうえで、グル・チェラ (Guru-Chela) 関係は最も重要な社会的基盤の一つである。KSは通常、いずれかのグループに所属して生活している。その中心にはグル (師匠) が存在する。グルは単なる指導者ではなく、生活上の保護者であり、相談相手であり、ときには経済的支援者でもある。共同体へ新たに加入した者はチェラ (弟子) となり、グルの保護下で生活する。有名で影響力のあるグルのもとには多くのチェラが集まり、大規模なグループが形成される。一方、影響力の小さいグルのグループは比較的小規模である。共同体内部には明確な秩序が存在し、年少者は年長者を敬い、重要な決定はグルによって下される。外部から見れば単なる友人同士の集まりや同居集団のようにも見えるが、共同体内部では家族として理解されている。実際の血縁関係は存在しないが、多くのKSにとって、この関係は血縁家族以上に重要な意味を持っている。また、多くのKSが原生家族と断絶しているため、新たな家族を形成する仕組みとして機能しているのである。

共同体内部には、グルとチェラ以外にも「マン(MaaN)」と呼ばれる重要な役割が存在する。マンとはパンジャブ語で「母」を意味する言葉であり、共同生活の運営や日常的な世話を担う人物を指す。多くの場合、マンはグルに次ぐ重要な立場にあり、共同体内部の調整役として機能している。また、グルが共同体における「男性役」を担い、マンが「女性役」を担うと説もあった。もっとも、これは生物学的な男女役割をそのまま反映したものではなく、共同体内部における権威、世話、管理、親族関係を説明するための比喩的な語りとして理解すべきである。

筆者自身も Ashee を母と呼ぶようになった。共同体内部の説明によれば、一人の KS は通常、自らのグルとマンを持つ。そのため、Ashee のチェラの一人が筆者のグルになることを申し出た際には、共同体内部でも自然なこととして受け入れられていた。この経験は、グル・チェラ制度が単なる組織構造ではなく、擬制的親族関係として機能していることを理解する重要な契機となった。

もっとも、こうした擬制的親族関係は、必ずしも全員が同じ家で生活していることを意味しない。筆者が長期間生活を共にした Ashee は、ラホールでもよく知られたグルの一人であり、多数のチェラを抱えていた。しかし、Ashee の住居は非常に狭く、すべてのチェラが同居することは不可能であった。

2017年5月から2018年6月までの期間、筆者は Ashee および Ashee のグループのマンと三人で生活していた。マンは共同体内部において家事や来客対応を担う存在であり、日常生活の維持に重要な役割を果たしていた。

一方で、Ashee の家には毎日のようにチェラたちが訪れていた。チェラたちは相談事を持ち込んだり、近況を報告したり、ときには単に顔を見せるためだけにやって来たりした。筆者には、誰がどのような順番や規則で訪れているのか最後まで十分には理解できなかった。しかし、こうした頻繁な訪問を通じて、チェラたちがグルとの関係を継続的に維持していることは明らかであった。つまり、グル・チェラ関係は単なる同居関係ではなく、

日常的な往来と相互扶助によって維持される社会関係なのである。

また、共同体内部にはファールシーと呼ばれる秘密言語が存在する。グルは共同体の規範や生活様式とともに、この言語をチェラへ教える役割も担っている。Urooj and Khan は、共同体内部の秘密言語に着目し、それが単なるコミュニケーション手段ではなく、共同体への帰属意識と連帯感を形成する重要な実践であることを指摘している (Urooj and Khan n.d.)。同論文によれば、Farsi はグル・チェラの生活空間の中で学習され、共同体成員を外部社会から区別する象徴的境界としても機能している。

しかし、KS 共同体は単なる親族集団ではない。彼らはまた、社会の中で特定の役割を担う存在として自己を理解していた。その代表的な実践が、次に述べるバダーイーである。

(2) 社会的役割、宗教的世界観、身体と親密性

バダーイーとは、結婚式や子どもの誕生など、人生の重要な節目において行われる祝福儀礼である。KS は祝いの場へ赴き、歌い、踊り、祝福の言葉を述べる。そして、その対価として金銭や食事を受け取る。伝統的に、多くの KS はこのバダーイーによって生計を立ててきた。

しかし、バダーイーの重要性は経済活動としてだけでは説明できない。多くの KS にとって、それは共同体の歴史や正統性を体現する実践でもある。彼らは、自らが何世代にもわたって受け継がれてきた

図1 ムルタン近郊の農村部における赤ちゃん誕生のバダーイー。祝福儀礼終了後、家族の男性から KS へ謝礼が渡される場面 (2018 年、筆者撮影)



役割を担っていると理解している。その意味において、バダーイーは仕事であると同時に、共同体の存在理由そのものでもある。

KSは社会的に周縁化される一方で、特別な力を持つ存在としても理解されている。筆者がパンジャブ州各地で行った聞き取りにおいても、「KSは特別な存在である」「KSの祈りは神に届きやすい」といった説明を繰り返し耳にした。また、KSは祝福を与える力だけでなく、呪いを与える力も持つと信じられている。結婚や出産といった人生の転換点において、KSの祝福を受けることは幸福をもたらす一方で、彼らを粗末に扱えば不幸が訪れるとも語られている。

では、KSの特別な力はどうのように説明されているのだろうか。この問いについて、筆者がKSと一般の人々に尋ねたところ、両者からほぼ同じ説明が聞かれた。すなわち、アッラーはすべての人間を平等に創造した。しかし、男性でも女性でもないKSは、一般の家族を作ることができず、子どもを持つことも、結婚生活という幸福を享受することも難しい。そのため、アッラーはその苦しみを埋め合わせるかのように、彼らの祈りにより注意深く耳を傾けるというのである。誰かがKSを非難し、その結果としてKSに呪われた場合、その不幸はアッラーによる懲罰として理解されることがある。

次に、2015年にラワルピンディで行われたインタビューを例に神聖な力を説明する。

筆者：KSは力を持っていると考えられているため、普通の人々はKSを呼んでバダーイーをすると聞きました。

KS (Bobi)：私たちは、普通の人々よりアッラーと近い。私たちは、男性ではなく女性でもない。だから、アッラーは私たちの祈りに注意深く耳を傾けている。

興味深いことに、この説明はインドのヒジュラに関する語りとは大きく異なっている。インドのヒジュラに関する叙述では、神聖性は神からヒジュラへ授与されるものとして語られる。ヒジュラは神と一般の人々との間に位置する特殊な存在であり、神から授与された神聖な力を用いて、人々に祝福や呪

いを与える理解されている。

これに対し、パキスタンで筆者が聞いた語りでは、アッラーは常に創造者であり、最終的な裁きの主体である。KSと一般の人々はいずれもアッラーによって創造された存在であり、神聖な力を所有するのは唯一神アッラーのみである。この意味で、KS自身が神聖な力を所有しているわけではない。むしろ彼らは、アッラーが自らの祈りにより注意深く耳を傾けてくれる存在として自己を理解しているのである。

図2 インドのヒジュラにおける神聖性の構造（筆者作成）

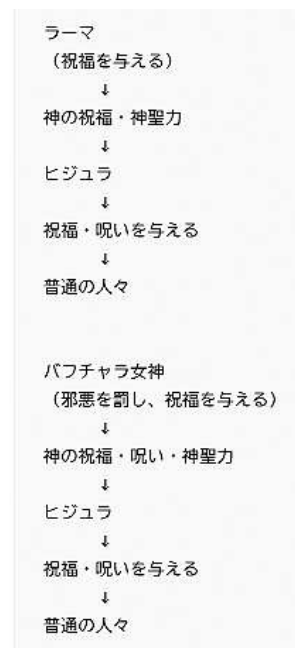
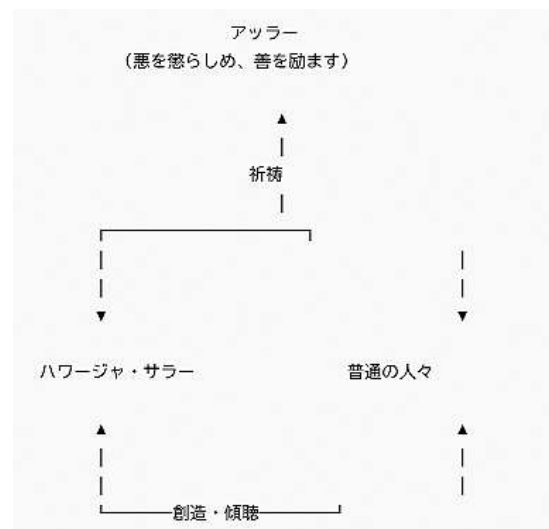


図3 パキスタンのKSにおける「神聖力の媒介」ではなく「神への近接性」のモデル（筆者作成）



※KSの祈りは、普通の人々よりもアッラーに聞き届けられやすい

ラホールのデータ・ダルバール、ムルタンのスーフィー聖者廟、シンド州のセフワーン・シャリーフなど、パキスタン各地の聖者廟はKS共同体にとって重要な宗教空間となっている。特にラール・シャーバーズ・カランダルの聖廟は、KSたちにとって精神的中心地の一つとして広く知られている。

このような宗教的世界観は、KSたちの日常生活における自己理解とも深く結びついている。KSたちは家族から拒絶され、教育や就労の機会を制限されるなど、社会の周縁に置かれている。しかしその一方で、自らをアッラーによって特別に創られた存在、神により近い存在として理解している。すなわち、KSにとって社会的周縁性と宗教的特別性は相反するものではない。むしろ、両者は相互に結びつきながら、彼らの自己理解を支えているのである。

KS共同体内部では、身体について語る際に「ナルバン（narban）」と「ゼンナナ（zanana）」という区分が用いられる。ナルバンとは、生まれながらに男性器を持たない者、あるいは身体的に両性具有として生まれた者を指すと説明される。こうした人々はしばしば「生まれながらのナルバン」と呼ばれ、共同体内部において特別な尊敬を受けることも少なくない。一方、ゼンナナとは、生物学的には男性として生まれながらも、女性的な服装や振る舞いを行い、KS共同体の一員として生活する人々を指す。

もっとも、筆者が行ったフィールドワークでは、実際にそのような身体的特徴を持つ人々は極めて少数であった。共同体の大多数を占めていたのはゼンナナであり、また一部には去勢した人々も存在していた。共同体内部では、去勢した人もまたナルバンとして語られることがある。しかし、実際には身体的状態そのものよりも、共同体の中でどのような人生を生活しているのかが重視されていた。

ナルバンやゼンナナといった身体分類は、バダイーへの参加資格、神聖性、本物／偽物をめぐる評価とも密接に結びついている。この点については別

稿（劉 2025）において詳しく論じたため、本稿では繰り返さない。ここで重要なのは、こうした身体分類が存在するにもかかわらず、それだけによってKSが定義されているわけではないという点である。

つまり、男性から女性への移行という物語ではなく、男性とも女性とも異なる第三の存在としての自己理解に基づいているのである。また、多くのKSは男性に対して性的・感情的な関心を持っていた。ある朝、母のAsheeの弟子の一人が、自らの腕を傷つけた写真をSNSに投稿した。Asheeはそれを見て、「みんな一度は通る道だ。そのうち落ち着く」と言った。男との恋愛による苦しみは、共同体の中で特別な出来事ではなく、むしろ共有された経験として理解されていた。

また、KSの中には家族からの圧力によって女性と結婚する者も少なくない。筆者が親しくしていた一人の「ゼンナナ」は、次のように言った：

私たちKSは男を愛する。しかし、結婚の必要もある。私の家族は私がKSであるということを知らない。私は自分の妻とセックスをしなければならない。これは本当に難しい。私たちが愛する男性は私たちを（性道具）として使用する。妻もまた同じように私を使用する。私たちは、セックスのために男性と女性に使用されている。これは運命だ。²

こうした経験から見えてくるのは、KSの人生が性別や性的指向だけによって規定されているわけではないという事実である。恋愛、婚姻、家族、経済活動、共同体への帰属が複雑に絡み合う中で、彼らたちは日常生活を営んでいた。ここで重要なのは、こうした経験が「同性愛」あるいは「トランスジェンダー」というカテゴリーによって理解されているわけではないという点である。KSたちにとって重要なのは、自分が誰を愛するのかよりも、自分がどの共同体に属しているのかということであった。

(3) 小括——KSの自己理解

以上見てきたように、KS共同体は単純なジェン

2 2016年2月20日、ラワルピンディで行なわれたニックネームはチュウヂというKSとのインタビュー。チュウヂは、ウルドゥー語とパンジャブ語で話した。筆者が内容を日本語に翻訳した。

ダー・カテゴリーとして理解することはできない。KSであることは、男性から女性へ移行すること、あるいは特定の性的指向を持つことだけを意味するのではない。

第一に、KS共同体はグル・チェラ関係によって維持される擬制的親族共同体である。そこでは、グル・チェラといった役割を通じて、血縁に基づかない新たな家族関係が形成されている。第二に、KSはバダーイーを通じて社会の中で特定の役割を担う存在である。彼らは単に周縁化された存在ではなく、祝福や呪いをめぐる語りの中で、特別な力を持つ存在としても理解されている。第三に、KSの自己理解は宗教的世界観によって支えられている。第四に、身体やセクシュアリティはKSの自己理解において重要ではあるものの、それだけでKSを説明することはできない。ナルバンやゼンナナといった身体分類は存在するが、KSであることの核心は身体的特徴そのものではなく、共同体への帰属、宗教的世界観、社会的役割を共有することにある。

この意味において、KSとは共同体であり、家族であり、宗教的世界であり、社会的役割でもある。彼らの自己理解は、LGBTQA+言説における性自認や性的指向を中心とする理解とは異なる基盤の上に成り立っている。次節では、このような自己理解を持つKS共同体が、2010年代以降、「トランスジェンダー」や「LGBTQA+」といった新たな言葉とどのように出会っていったのかを検討する。

第3節 LGBTQA+LGBT 言説は いかに KS 共同体へ流入したのか

(1) 法制度、HIV/AIDS対策、NGO化の背景

前節で見たように、KS共同体は、グル・チェラ関係、バダーイー、宗教的世界観、身体分類、親密関係によって構成される独自の社会的世界であった。したがって、KSを単純に「トランスジェンダー」や「LGBTQA+」の一部として理解することはできない。

しかし、2010年代以降、パキスタンにおいてKS共同体は「トランスジェンダー」や「LGBTQA+」

という新たな言葉と頻繁に接触するようになる。この変化は、共同体内部から自然に生じたものではなかった。むしろ、法制度改革、HIV/AIDS対策、NGO活動、国際援助といった複数の回路を通じて、外部から共同体へ入り込んだものであった。2009年の最高裁判決以降、KSを含む第三の性に対する法的承認が進み始めた。その後、身分証明書、選挙権、教育、雇用、医療、相続などをめぐる権利の議論が拡大し、2018年にはトランスジェンダーの権利を保護する法律も制定された。こうした法制度上の変化は、KSを国家制度の中で可視化する重要な契機となった。

一方で、同性愛やLGBTQA+運動全体に対する社会的・宗教的抵抗は依然として強かった。パキスタンはイスラム共和国であり、同性愛は公的言説において宗教的・道徳的逸脱として語られてきた。また、同性間の性行為は刑法およびイスラム道徳規範の下で否定的に捉えられており、LGBTQA+運動が公然と展開されることは容易ではなかった。

Khubchandani (2016) は、南アジアにおけるLGBT活動の多くが、HIV/AIDS対策を契機として発展してきたことを指摘している。特にMSM (Men who have Sex with Men) やトランス・フェミニンな人々は、公衆衛生政策における「リスク集団」として位置づけられ、その支援を目的とするNGOが各地で設立された。こうした過程の中で、欧米で形成されたLGBTQA+というカテゴリーや権利言説も同時に流入していったのである (Khubchandani 2016)。パキスタンにおいても同様に、HIV/AIDS対策は性的少数者コミュニティと国際機関、政府、NGOを結びつける重要な回路となった。性的少数者の権利を直接主張することが困難な社会状況の中で、「健康」「感染症予防」「男性健康」「コミュニティ支援」といった比較的中立的な言葉は、性的少数者を支援するための実践的な入口となったのである。

この点は、KS共同体とLGBTQA+言説の関係を考えるうえで重要である。LGBTQA+という言葉は、最初からKS共同体の自己理解を置き換える思想として入ってきたわけではない。それはまず、

HIV/AIDS対策、無料健康診断、心理相談、コンドーム配布、教育プログラム、国際援助といった具体的なサービスや資源と結びついて共同体へ接近したのである。したがって、KS共同体にとってLGBTQA+言説は、まず第一にアイデンティティを表現するための言葉ではなかった。むしろそれは、新しい資源へアクセスするための制度的言語であった。医療へつながる言葉であり、教育を受けるための言葉であり、NGO活動に参加するための言葉であり、国際機関や海外ドナーと関係を結ぶための言葉であった。このような状況の中で、LGBTQA+言説は主としてNGO活動を媒介として広がっていった。その代表的な事例が、本稿で取り上げるNAZである。

(2) NAZの設立と活動

前節で述べたように、パキスタンにおいてLGBTQA+言説が広がる重要な契機の一つは、HIV/AIDS対策を中心とするNGO活動であった。その中でも、性的少数者支援を目的とする代表的な組織がNAZである。

パキスタンにおいて最も早期に設立され、かつ大きな影響力を持ったLGBTQA+関連NGOの一つが、2010年にガシムによって設立されたNAZである。ガシムは、アメリカで生まれたパキスタン人である。パキスタンの性的少数者の権利を守るために西洋の権利運動をパキスタンで試みる目的でアメリカ国籍を捨て、パキスタンに戻った。ガシム自身はゲイであり、南アフリカにおいて同性パートナーとの結婚経験を有している。ガシムとそのパートナーは長年にわたりLGBTQA+支援活動に従事してきた。筆者は彼らの知遇をえて、LGBTQA+のNGOに関する情報を得ることができた。

ガシムは次のように語った：

私はアメリカからパキスタンに移住した。なぜな

ら、パキスタンでは多くの人が助けを必要としていたと知っていたからだ。ゲイには、なぜ自分が男性のことが好きなのかわからないという人がおおい。家族からは恥あるいはハラームとおもわれ、ゲイであることを禁止された。あるいは、家を出てハワージャ・サラーになった。³ LGBTのNGOがあるなら、そのような人々にとって助けとなる。パキスタンに帰国後、まず政府のHIVコントロール部門ではたらいた。そして私は、HIV部門とHIV感染者の間には大きなギャップがあることに気付いた。自分はすでにHIVに感染しているので、多人数とのセックスが最大の感染経路だとわかった。特にパキスタンにはMSM（男性と男性のセックス）が多い。しかし家族や宗教、社会からさまざまなストレスがあり、人は自分の悩みを秘密にし、誰にも言わない。HIVに感染したとしても、病院にもいかなないのでわからない。したがって、間接的に他人に病気をうつすリスクが高くなる。今、パキスタン政府はトランスジェンダー人口に非常に注目している。ハワージャ・サラーにはIDカードを配る。ゲイやMSM男性が、私のNGOに協力してくれると考えた。私が2010年に作った組織は、MSMとHIVのための唯一の組織だった。今、私たちはこれをLGBTQA+組織として発展させてきた。⁴

ガシムの発言から、パキスタンにおけるLGBTQA+のNGOの短いながらも困難な歴史の一部を垣間見ることができる。今日にいたるまで、性的少数者に対する差別は解消されていない。同性愛、すなわち「ソドミ」が違法であるイスラム教のパキスタンでLGBTQA+の権利運動を行なうことは、危険であると思われる。実際にガシムは、殺害予告という脅迫を受けたこともある。しかし、それでもなお、NAZが長年にわたって存続していた⁵ 背景には理由がある。

まず、NGOリーダーとしてのガシムを知るより

3 この発言は、ガシムがゲイ、MSM、KSを連続的な性的少数者カテゴリーとして理解していることを示している。しかし、第2節で見たように、KS自身の自己理解は必ずしもこの枠組みと一致していない。この認識の差異は、後にKS共同体とLGBTQA+言説との間に生じる緊張を理解する上で重要である。

4 2015年4月22日にラホールでガシムとのインタビュー。英語で話した。筆者が内容を日本語に翻訳した。

5 NAZの活動は2022年頃に停止した。

も前に、ハフェーズ・ジャランダリ⁶の孫としてのガシムを知る人のほうが多い。ガシムの出自は、彼の活動に対する一種の社会的保護として機能していた。パキスタン社会では個人的な人脈が社会的資源として大きな意味を持つ。上流社会とのつながりを持ち、政府関係者や著名人との幅広い人的ネットワークを有していたことは、ガシムの活動を支える重要な資源となっていた。第二に、NAZの従業員たちはほぼ全員が性的少数者メンバーであるとカミングアウトしている。「コミュニティのみがコミュニティを真剣に助ける」とガシムは信じているようだ。だから、すべての同僚が性的少数者メンバーであるという自覚をもってもらいたいと考えている。同じ状況の人々はお互いをよく理解できる。お互いに仲良く協力する。コミュニティへの責任と忠誠心が確認され、組織の安定性と安全性が確保されるとガシムは信じていると述べた。また、彼らの大部分はスタイリッシュな、高学歴の若い男である。彼らは中・上流階級の出身であり、自分の家族たちからも受け入れられている。自分の家族とのつながりや、友人関係を上流階級へのアクセス手段としてLGBTQA+の人々のために利用できる。最後に、NAZはLGBTQA+組織ではなく、「NAZ Male Health Alliance (NAZ男性健康センター)」という名称で登録された。性的少数者団体として公然と活動することが困難な社会環境を考慮したためである。組織の主要な活動も、HIV/AIDS予防、性感染症検査、心理相談、健康教育など、公衆衛生分野に重点が置かれていた。HIV/AIDSやその他の性感染症の予防も、重要な活動目的の一つであった。この目標のために、無料の健康診断と安全性を確保するためのセックス授業を行い、無料のコンドームを配るなどの活動をおこなっている。また、NAZの運営資金の多くは海外ドナーによって支えられていた。世界基金(Global Fund)、国連開発計画(UNDP)、欧州諸国の援助機関などが主要な支援者である。そのため、政府との間に一定の協力

関係が成立していた。このようにして、NAZはゆるやかに発展してきている。

NAZは単なる医療支援団体ではなかった。それは性的少数者コミュニティと国際援助機関、海外ドナー、人権言説を結びつける媒介組織として機能していたのである。NAZは政府資金に依存していなかったが、その活動は公衆衛生政策を補完する役割を果たしていた。

このような特徴を持つNAZは、やがてゲイ、MSM、トランスジェンダーだけでなく、KS共同体とも密接な関係を築いていくことになる。もっとも、その関係は単純な包摂ではなかった。KS共同体はNAZから多くの資源や機会を獲得した一方で、その価値観やカテゴリーを全面的に受け入れたわけではなかった。

(3) KS共同体とNAZ

——資源・機会・新たな可能性

NAZは設立当初から、ゲイやMSMだけでなく、KS共同体との関係構築にも積極的であった。しかし、その目的は単純なものではなかった。2010年当時、パキスタン社会においてLGBTQA+あるいは「ゲイ」のための組織を公然と展開することは容易ではなかった。一方、KSはすでに社会的に認知された存在であり、2009年以降は国家による法的承認も進みつつあった。そのため、NAZにとってKS共同体との協力は、性的少数者支援活動を社会的に正当化する上で重要な意味を持っていた。

ガシムはこの点について次のように説明している。

私たちは、地元のコミュニティ(支部)が望むような名称を使用することに決めた。地元の人々の同意を得て、地域のコミュニティの名前を付けた。名前を決めたるに会議を行なった。ラホールの「ハワージャ・サラー・ソサイエティー」を作り始めたとき、我々はラホールの有名なグルを何人か会議に呼んだ。そして、長い論戦の後、最終的に彼らがこういう名前に決めた⁷

6 パキスタンの有名な詩人、パキスタン国歌の作者。

7 2015年4月22日にラホールでガシムとのインタビュー。英語で話した。筆者が内容を日本語に翻訳した。

この発言が示すように、NAZはKS共同体を一方的に包摂したのではなく、既存の共同体構造を利用しながら協力関係を構築していた。ラホールには「Khawaja Sara Society」が設立され、KS自身が活動を担う支部として機能するようになった。

もっとも、KSがNAZへ参加した理由は、必ずしもLGBTQA+の理念への共感だけではなかった。むしろ、多くのKSにとって魅力的であったのは、NAZが提供する具体的な資源や機会であった。

筆者がラホールで調査を行っていた時期、NAZは無料のHIV検査や性感染症検査、心理相談などの医療サービスを提供していた。また、識字教育、ウルドゥー語教育、英語教育なども実施していた。参加者には食事や交通費が支給されることもあり、多くのKSがこれらのプログラムに参加していた。

こうしたサービスは、多くのKSにとって非常に魅力的なものであった。というのも、共同体の多くの成員は十分な教育を受ける機会を持たなかったからである。そのため、ウルドゥー語の読み書きや英語教育は、多くのKSにとって新しい可能性を意味していた。

特に印象的だったのは、NAZの職員たちがKSの言語や生活様式を理解しながら活動していたことである。ラホールの支部では、KS出身のスタッフが中心となり、参加者たちにウルドゥー語や英語を教えていた。授業では、共同体内部で使われる秘密言語や地域方言を交えながら説明が行われていた。その結果、多くのKSが初めて学校とは異なる形で学習の機会を得ることになった。

あるKSは筆者に対して、「私も英語を勉強して、海外へ行きたい」と語っていた。こうした語りは、教育が単なる知識習得ではなく、新しい社会的可能性と結びついていたことを示している。

2010年代半ばになると、NAZと国際機関との連携はさらに拡大していった。その結果、一部のKSたちは海外へ渡航する機会を得るようになった。2015年8月、英語を使う海外機関との国際的なイベントを開始した。組織内で担当したトランスジェンダー1名とKS10名がデンマークで開催された国際イベントに参加した。続いて2016年1月には、数名

のKSがアメリカでパフォーマンスを行った。それまで社会的周縁に置かれていたKSたちが、自らの経験を語る主体として国際社会から招かれたのである。特に若い世代のKSにとって、NGO活動は従来とは異なる成功のモデルを提示していた。その結果、こうした資本を獲得した一部のKSは、自らを活動家やトランスジェンダーとして再定義し始めたのである。

従来のKS共同体では、権威は主として年齢、経験、グルとしての地位によって形成されていた。しかし、NGOの世界では別の価値基準が存在していた。英語を話せること、コンピュータを使用できること、報告書を書くことができること、行政機関や海外組織と交渉できることなどが、新たな資源として重要な意味を持つようになったのである。人権やジェンダーについて語るができることが、新たな評価基準として現れ始めたのである。

図2 オランダで開催されたトランスジェンダー映画祭期間中、KS代表二りのためにパキスタン料理を作るKS (2017年、筆者がオランダで撮影)



したがって、NAZとKS共同体の関係は、単なる支援者と被支援者の関係ではなかった。教育を受け、英語を学び、国際移動、雇用機会をめぐる資源交換の関係であり、同時にKS共同体の内部に新たな価値基準と社会的上昇経路をもたらし、自己理解の変容を促す媒介として機能したのである。また、この変化は共同体全体に均等に広がったわけではなかった。ラホールやカラチでは国際交流の機会が増加していた一方、ムルタンや南パンジャブ地方で

は依然として伝統的な生活様式が中心であった。こうした変化は、やがてKS共同体とLGBTQA+言説との間に新たな緊張を生み出すことになる。

第4節 制度化されるアイデンティティ： ID 制度と命名の政治

第2節で述べたように、KS共同体の自己理解は、グル・チェラ関係による擬制的親族関係、バダーイーを中心とする社会的役割、イスラムに基づく宗教的世界観によって支えられている。多くのKSは、自らを「男性から女性へ移行した存在」として説明するのではなく、「男でも女でもない第三の存在」として理解していた。

実際に筆者がフィールドワークで接したKSたちは、
「私は男ではない」
「私は女でもない」
「私はKSだ」
と繰り返し語っていた。

このような自己理解は、性的指向や性自認を中心に構成されるLGBTQA+言説とは必ずしも一致しない。LGBTQA+というカテゴリーが個人の性的指向やジェンダー・アイデンティティを基礎としているのに対し、KS共同体において重要なのは、共同体への帰属、宗教的世界観、そして社会的役割であった。そのため、多くのKSはLGBTQA+というカテゴリーに包摂されながらも、それを完全には自己のものとして受け入れていなかった。

もっとも、すべてのKSが同じ立場をとっていたわけではない。NAZとの接触を通じて、一部のKSは自らを「トランスジェンダー」として再定義するようになった。

その代表的な例が、カラチ出身のナサリンである。ナサリンはグルに師事してKSとなった後、ラホールへ移住し、NAZの活動に参加した。ナサリンは現在、自らをトランスジェンダーとして説明してい

る。グルを持っていることは認めていたものの、実際にはグルとの関係は希薄であり、バダーイーにもほとんど参加していなかった。

同様に、NAZのカラチ支部で活動していたガミも、自らをKSではなくトランスジェンダーであると説明していた。

パキスタンではトランスジェンダーとハワージャ・サラールの両方がいる。ハワージャ・サラールは南アジア文化、歴史の範囲に属し、特定のシステムを持つ伝統的なものだ。トランスジェンダーは、必ずしもハワージャ・サラールであるわけではない。ハワージャ・サラールはグル・チェラというシステムに従う者である。私は誰の弟子でもない、ハワージャ・サラールにはならない、トランスジェンダーだ。ハワージャ・サラールではないのだが、私と彼らは同じ性的少数者コミュニティに属している。同時に、私は自分の良き家族にも属する。私の家族はトランスジェンダーとしての私を受け入れて、良い教育を与えてくれた。私はコミュニティの健康と権利のために働いている。⁸

ガミの発言は、トランスジェンダーとKSが必ずしも同一のカテゴリーではないことを示している。彼女にとってトランスジェンダーとは、教育を受け、家族との関係を維持しながら社会で活動する主体であり、KSとは異なる社会的位置づけを意味していた。

NAZの人気と業績は発展するとともに、2016年の初めに独立した組織となった。ハワージャ・サラール・ソサイエティーがKSの完全な自営組織となった。さらに、新しいリーダーもでてきた。最初のリーダーであるシナ⁹は、もともとはKSであったものの、英語を勉強して活動家になったが、NGOの理念には慣れていなかったため、ガシムたちと意見が食い違うことがよくあった。コミュニティ内部からの批判もしばしば受けた。シナは、ガシムとの活動を通じて、乞食と売春など自由なKSがよい

8 2015年4月15日にカラチでガミとのインタビュー。英語で話した。筆者が内容を日本語に翻訳した。

9 シナは仮名。2015年5月、筆者とシナはハワージャ・サラール・ソサイエティーで会った。2016年2月、ガシムとのインタビューよりシナの近況を聞いた。

と思うようになった。そしてカラチへ行き、KSの生活にもどった。一方、NGOを組織すれば、お金と名誉を得ることができるとKS内部では信じられるようになった。自分のNGOを組織したいと思うようになった。都市のKS、特にグルは、NGOの名刺を印刷し、自分がNGOを組織していると説明することが少なくない。あるグルの例について、ガシム次のようにコメントした。

彼ら（ハワージャ・サラール）はすべてお金のために自分のNGOとプロジェクトを欲しがっている。私は彼女（話題のグル）が実際にはプロジェクトを組織していないと思う。彼女はファンダから援助を受けることができない。援助を受けることができたとしても、彼女が自分で管理することはできない。教育がない彼女はどのように（英語で）レポートを書いてドナーを満足させることができるだろうか。管理能力はハワージャ・サラールにとって大問題でもある。ビンヂア¹⁰のNGOにも同じような問題があった。私は彼女のために英語の提案書を書いた。私はシンドのラナ、スカルのxx…のためにもたくさんの書類を書いた。¹¹

ガシムの説明は以下の通りである。ハワージャ・サラールたちが自身のNGOを設立し、活動するためには、お金が必要である。ガシムのように海外から資金を提供してもらうために最も必要なことは、英語で提案書を書くなどの、海外のドナーを探して交流できる能力である。ドナーの関心を理解する能力も必要である。ドナーが望むようなやり方で資金を使用し、国際的な作法にのっとって英語でレポートを書き、NGOの運営状況を報告するといった、ゲームのプレイヤーがルールを理解するのと同じようなことが必要である。しかし上述したように、ハワージャ・サラールは、一般的に教育が低く、英語の能力がない。それゆえに彼らは海外ドナー、主に欧米の組織の考え方を全く理解することができない。

もしも、自分で英語や欧米のロジックとルールを学んだとしても、資金を探し、海外組織との関係を構築するようなことは、ハワージャ・サラールにとって非常に困難である。だから、ハワージャ・サラールは助けを求める必要がある。

ガシムと彼のLGBTのNGOは、NGOを組織したい「ハワージャ・サラール」にとって最も身近な支援者であり、情報資源となっていた。しかし、LGBTとハワージャ・サラールの問題は、お互いに協力するうちに生じた。LGBT活動は欧米で生まれたものである。LGBTのNGOは欧米の人権思想を持っている。彼らはコミュニティ全体の利益のために戦う。自分の権利を守る。LGBTのために平等な権利を求める。前に述べたように、ハワージャ・サラールはLGBTに入れない。南アジアの伝統文化に従っているので、自分が欧米風のゲイやトランスジェンダーとは考えていない。しかも、ハワージャ・サラールは自分の独自性を信じており、普通の人々よりアッラーと近い敬虔なムスリム教徒であることがおおい。同性愛者は教義違反と考えている。「ガシムたちはゲイ、彼らは間違っている」と述べるAsheeの意見は、非常に典型的である。「私たちはイスラム教を信仰しており、同性愛は許さない。我々ハワージャ・サラールは、生れながらにハワージャ・サラールである。トランスジェンダーは自分の体を変えことになる、これはハラームであり、アッラーが許可しない」¹²。一方、NGO内部のハワージャ・サラールスタッフがガシムを悲しませることも多い。

彼らがお金にしか興味がなく、有名になりたいだけであるからである。バリ¹³は、かつて一生懸命に英語を勉強した。私（ガシム）は彼女を手伝って活動をした。彼女は有名になった。いろんなテレビ番組に行って、お金を稼ぐようになった。そして彼女は満足して、今ではNGO活動をすべてやめた。彼

10 ビンヂアはカラチの有名なグルである。ガシムと仲良く友達になった。ビンヂアが自分のNGOを作った。

11 2016年2月20日にラホールでガシムとのインタビュー。

12 2016年3月、筆者はAsheeの家で泊まった時にAsheeの雑談より

13 バリは仮名、ラワルピンディのあるグルのこと。

らはコミュニティー全体の権利のために何をするかを考えない。私たちLGBTのメンバーと一緒に、なって自分たちの権利のために努力しているにもかかわらず。ハワージャ・サラールとの協力は実際には非常に困難だ。最近、私はドナーにレポートを書く時に、LGBTとハワージャ・サラールを別々に書きはじめています。ハワージャ・サラールとの協力をへらしていきたいとおもっている。¹⁴

ここで注目すべきなのは、Asheeが自らを性的少数者であることによって正当化しているのではなく、イスラムの信仰と神の創造という論理によって正当化している点である。Asheeにとって、KSとは神によって創造された存在であり、その特殊性は宗教的に認められている。一方、同性愛やトランスジェンダーは個人の選択によるものとして理解されており、宗教的正当性を持たないと考えられていた。

こうした対立は、2016年の結婚ファトワ事件においてより明確に表出した。

2016年6月26日、Tanzeem Itehad-e-Ummatというイスラム教組織により、50名の宗教指導者が突如連署し、「ハワージャ・サラールのニッカ¹⁵はイスラム法の下で許される」という題名の「ファトワ」¹⁶を発表した。同時に、ハワージャ・サラールが一般のイスラム教徒と同様の権利を享受するとし、同じルールを守るということを強調した。ハワージャ・サラールの中で「目に見える女性的兆候を持つ人」は、男性あるいはハワージャ・サラールと結婚する権利があり、「目に見える男性的兆候を持つ人」は女性あるいはハワージャ・サラールと結婚する権利があるというファトワが与えられた。¹⁷

この直後、ガシムとNAZの代表者たちは、宗教指導者の代表たちとの公式対談をもよおし、次のように宣言した。

6月26日にTanzeem Itehad-e-Ummatによって

なされたファトワについて、NAZパキスタンは宗教指導者たちと確認した。パキスタンで、多くの人々は「ハワージャ・サラール」を生まれながらに外生殖器両性具有の人であると誤解している。6月26日にもそういう誤解を強調していた。しかし、人々がハワージャ・サラールや両性具有の人たちに関心をもつことを、NAZパキスタンは歓迎する。これはパキスタン史上初の、宗教団体から性的少数者に対する支援宣言である。同時に、NAZパキスタンは人々がトランスジェンダーや同性愛者を否定するような態度に強く反対する。¹⁸

他方、ファトワのニュースが出た直後に、Asheeと筆者は携帯電話で連絡した。パキスタンで大事件があったと教えられた。宗教指導者は間違った発言をしたとAsheeは述べた。翌日、Asheeとハワージャ・サラールのグルたちがテレビ番組に出演した。ハワージャ・サラールは結婚できないということは、神によって決定されたことである。宗教指導者たちは間違ったファトワを出した」というグルたちの意見が述べられた。

ここで対立していたのは「権利を求める人々」と「権利に反対する人々」ではなかった。両者ともKSの尊厳を認めていたのである。しかし、その尊厳をどのような論理によって正当化するのかについて、大きな違いが存在していた。

NAZが平等な権利、自己決定、人権を重視していたのに対し、Asheeたちは伝統、宗教、共同体秩序を重視していた。つまり、両者の対立は性的少数者であるか否かではなく、どのような世界観によって自己を理解するのかという問題であった。

実は、筆者が接触した人々の中には、KSとしての共同体への帰属を維持しながら、同時にトランスジェンダーという言葉を用いる者も存在した。あるいは、状況によってKSとトランスジェンダーと

14 2016年2月20日にラホールでガシムとのインタビュー。

15 イスラム教による婚姻の証明文書。

16 イスラム教においてイスラム法学に基づいて発令される勧告、布告、見解、判決。

17 The Express Tribune Pakistan, 27th, June, 2016 Can transgender marry? Yes says new Fatwa

18 2016年6月ガシムがLGBTの内部ページで書いたNAZ Paksitan Meets Tanzeem Itehad-e-Ummat to discuss the recent Fatwa on marriage equality for KS (hijra)という文より

いう二つの自己表現を使い分ける者もいた。「KS か LGBTQA+ か」という二者択一的な視点ではなく、両者の接触によって生じる交渉、再編、そして新たな自己理解の形成過程に注目する必要がある。

第5節 おわりに

本稿では、現代パキスタンにおけるKS共同体とLGBTQA+言説との関係について、筆者の長期的な民族誌的調査に基づき検討してきた。特に本稿が問うたのは、KSがLGBTQA+に「含まれる」のか否かという分類上の問題ではなく、グローバルなLGBTQA+言説がパキスタン社会に流入するなかで、KS共同体がそれをどのように受容し、利用し、翻訳し、再構成してきたのかという問題であった。

第2節で明らかにしたように、KS共同体の自己理解は、単なる性自認や性的指向によって説明できるものではない。KSであることは、グル・チェラ関係による擬制的親族関係、バダーイーを中心とする社会的役割、信仰と結びついた宗教的世界観、そして共同体への帰属意識によって支えられていた。

一方、第3節で論じたように、2010年代以降、KS共同体は法制度改革、HIV/AIDS対策、NGO活動、国際援助を通じて、LGBTQA+やトランスジェンダーという新たな言葉と頻繁に接触するようになった。とりわけNAZのようなNGOは、医療、教育、雇用、国際交流といった具体的な資源を提供することによって、KS共同体と国際的人権言説を結びつける媒介者として機能した。LGBTQA+言説は、KS共同体にとって、当初から自己を説明するためのアイデンティティ言語であったというよりも、むしろ医療サービス、教育機会、国際ネットワーク、ドナー資金へアクセスするための制度的言語として受容されたのである。

しかし、この過程は単純な「包摂」や「統合」として理解することはできない。LGBTQA+言説は、KS共同体に教育、医療、国際交流、権利獲得のた

めの新たな可能性をもたらした一方で、従来の共同体秩序や宗教的世界観との間に摩擦も生み出した。多くのKSにとって、自らを規定する中心的な要素は、性的指向やジェンダー・アイデンティティではなく、グル・チェラ関係、バダーイー、宗教的世界観、そして共同体への帰属であった。

そのため、KS共同体はLGBTQA+というカテゴリーを利用しながらも、その内部に完全に吸収されることはなかった。むしろ彼らは、法制度、NGO活動、国際援助、宗教的世界観、共同体内部の権威関係といった複数の文脈の中で、LGBTQA+言説を状況に応じて使い分け、再配置していた。人権言説は権利獲得のために用いられたが、宗教的世界観は放棄されなかった。国際的なカテゴリーは採用されたが、共同体の秩序は維持されたのである。

つまり、KS共同体はグローバルな言説の単なる受容者ではなく、それを自らの文脈に即して翻訳し、選択的に利用し、再構成する主体であった。この意味において、本稿が明らかにしたのは、LGBTQA+言説の一方的な「浸透」ではなく、その「翻訳」の過程である。KS共同体はLGBTQA+言説によって消滅したのではない。むしろ、その言説との接触を通じて内部に新たな分化と再編を生み出しながらも、自らの社会的世界を維持し続けていたのである。さらにいえば、この翻訳の過程は、LGBTQA+という普遍のカテゴリーそのものの境界を問い直すものでもある。そこにこそ、現代パキスタンにおける第三の性共同体とグローバル人権言説の接触がもつ複雑さがある。

謝辞：本研究の一部は、JSPS特別研究員奨励費（課題番号：17J04037）の助成を受けたものです。また、調査を進める過程では京都大学人文科学研究所、京都大学大学院人間・環境学研究科文化人類学専攻に所属しており、専攻の皆さまにはご支援を賜りましたことを感謝申し上げます。

参考文献

日本語文献

劉高力. 2025. 「アイデンティティをめぐる制度と象徴——パキスタンにおけるハワージャ・サラーの命名とその帰結」『アジア民族造形学会誌』21(1): 3-14.

https://doi.org/10.60289/aeefa.21.01_3 21.

英文文献

Khan, Shahnaz. 2016. "What Is in a Name? Khwaja Sara, Hijra and Eunuchs in Pakistan." *Indian Journal of Gender Studies* 23(2): 218-242.

Khan, Md. Salman. 2019. "LGBTQI Activism and Human Rights in Pakistan, Its History and Progress." *Indian Journal of Health, Sexuality & Culture* 5(1): 103-109.

Khubchandani, Kareem. 2016. "LGBT Activism in South Asia." In Nancy A. Naples(ed.), *The Wiley Blackwell Encyclopedia of Gender and Sexuality Studies*.

Hoboken: John Wiley & Sons. DOI: 10.1002/9781118663219.wbegss675.

Livia, Anna and Kira Hall. 1997. *Queerly Phrased: Language, Gender, and Sexuality*. Oxford: Oxford University Press.

Lugones, María. 2007. "Heterosexuality and the Colonial/Modern Gender System."

Hypatia 22(1): 186-209.

Merry, Sally Engle. 2006. *Human Rights and Gender Violence: Translating International Law into Local Justice*. Chicago: University of Chicago Press.

Nanda, Serena. 1989. *Neither Man nor Woman: The Hijras of India*. Belmont: Wadsworth Publishing Company.

Reddy, Gayatri. 2010. *With Respect to Sex: Negotiating Hijra Identity in South India*. Chicago: University of Chicago Press.

Tsing, Anna Lowenhaupt. 2011. *Friction: An Ethnography of Global Connection*.

Princeton: Princeton University Press.

Urooj, Nida and Muhammad Khan. n.d. "Farsi Language among Khawaja Sara Community in Pakistan."